

# 經濟論叢

第九十卷 第四號

---

ストレーチーの帝國主義論（序説）…… 静 田 均 1

アルファデルフィヤ・

アッソシエーション…………… 穂 積 文 雄 18

プレハーノフのロシア資本主義論(=)… 田 中 真 晴 40

アメリカにおける公益

事業の料金形成の一過程…………… 野 村 秀 和 66

---

昭和三十七年十月

京 都 大 學 經 濟 學 會

## アルファデルフィア・アツシエーション

## 穂 積 文 雄

一八四〇年代、アメリカにユートピア運動がまきおこった。フリーエー派のファランクスが各地に簇生した<sup>1)</sup>。かくて、ミシガン州にもその二つが出現するをみた。アルファデルフィア (Alphadelphia) は実にその一つである。アルファデルフィアという名はファースト・ブラザーフッド (First Brotherhood) の謂である。

アルファデルフィアの歴史は一八四三年から翌年にかけての冬にさかのぼる。当時ミシガン州アナーバー (Ann Arbor) にプリミチブ・エクスパウンダー (Primitive Expounder) という新聞があった。一八四三年十二月はじめとおもう。おもうというのは、たしかな日付は、いまわたくしの手のとどかぬところにあるからである。だから、あるいはそれよりもすこしまえであったかもしれない。いずれにしても、そのころのことである。のちに述べる事態の進行から推してゆけば、そうでなければならぬ。一日、ファランクス創立のよびかけがその紙上にあらわれた。そのよびかけも、その新聞が、わたくしにとつては、七つのかぎでとぎされたからとおなじことだから、くわしくつたえることは、できない。しかし、それが、その年十二月二三日、ミシガン州・ジャクソン郡・コロンビアのクラーク・レーク (the head of Clark's lake in Columbia, Jackson county) の小学校で、創立の会議を開催することをつげ、ひろく同志をつのつたものであることは、たしかである。というのは、その指定の日、そ

の指定の場所には、右のよびかけにに応じて、州内各地から馳せ参ずるもの五六人におよび、会議がもたれているからである。<sup>3)</sup> それでは、そのよびかけをしたものはたれか。それも、右述べたような事情の下では、はっきり、たれと、確言することは、できない。だが、およその見当はつく。それは、シェッターリイ博士(Dr. H. R. Shetterly)である。すくなくとも、かれが、その中心人物であることには、まちがいが無いといってよからう。それは、かれが、一八四四年五月二〇日付けでかいた手紙の中で、一八四三年二月はじめからかれの「時間のすべては、アルファデルフィアの結成にささげられた」といつておるし、<sup>4)</sup> また、ノイエス(John H. Noyes)が、アルファデルフィアについて、「このアソシエーションは……一八四三―四四年の冬、主として、ミシガン州アナーバーのシェッターリイ博士の努力によつてはじめられた」といつておるによつて、うなずけるところであらう。それではシェッターリイ博士とはいかなるひとであらうか。ここで、ちよつと、そのプロフィールをうかがつてみよう。つたえられるところは、こうである。ドイツ人。せいはひくい方、やせがた、かみも眼もおもしろも、くろいろ。フリーエリズムの熱烈な信徒。統卒力に富み、雄弁家。<sup>5)</sup>

さて、そのファランクスを創立する会議であるが、それは、前述のごとく、指定の時、指定の場所で開かれた。そして三日間にわたり、早朝から深夜におよぶ熱心なはなしあい、が展開した。その結果まづ規約(constitution)の大綱が作成せられ、採択され、ついで、その修正・完成のことが委員に委嘱された。委員には三名のものが指名された。その中に、シェッターリイ博士がいたことはいうまでもない。さらに、この会議では、ファランクスを設立する適当な場所として、三つの候補地があげられ、その視察調査のために、さらに別の委員会が指名せられた。わがシェッターリイ博士はこの委員会にもその名をつらねている。そして、この会議は、翌一八四四年一月二日イートン

郡のベルブエ (Bellevue, Eaton county) において、会議をもち、そこで、規約の修正・完成・採択をするということ、および候補地に関する委員の調査報告を聴取するということを決定して散会した。

会議散会の後、候補地調査委員会は早速活動を開始した。そして、一八四四年一月三日、ベルブエで開かれた会議に報告書を呈出した。その結果、カラマゾー郡コムストック町 (the township of Constock, county of Kalamazoo) の南東部の地がかれらのファランタスの地ときまつた。この地の利点を委員会の報告は、つぎのごとく述べてゐる。

この地は、カマラゾー河が貫流している。カマラゾー河は大きな、うつくしいながれである。ははは六ロッツ (Foot、訳者注、一ロッドは五ヤード半、すなわち、五・〇二九二メートル) ぶかさは中流において五フィート、水速毎時約四マイル、そして、八フィートの高さの滝がある。この滝は、たいして土地をながれることなく、(without flowing any land worth mentioning) 一マイル半ばかりのながさの水降を掘鑿することによって、利用することができ、水がれのもっともはなはだしい季節においても、石の一〇〇ランを推転するであらう。掘鑿は容易である。つちかきと、教組のなかまでたるであらう。そしてマンション (訳者注、マンションタスにおいて、普通マンランステリーとよばれるものに該当すると解してよからうとおもふ。) と工場がたつのは、この河にむかしたゆるやかな勾配のうつくしい平原で、ひろさ、五〇ロッツと六〇ロッツ、南側は河に平行して走る高さ約二〇フィートの丘陵によってめぐらされている。この丘陵をこえて一〇乃至三〇ロッツばかり行くと、おたやかな起伏の平原が南東西方数マイルにわたってひろがっている。この平原は、本委員会 (Your committee) がこれまでみた中でもっとも繁茂した森林によっておおわれている。その森には、白色櫨、黒・白・青灰色、および白と赤の櫨、ぶなが二種、にれが二種、黒色のくるみ、やわらかい楓、若干の桜、それから、特別にかたい良質・大量の楓がある。毎秒一バレルの水をふき出しているいづみ、マンションと工場の建設予定地から一マイル半のところにある。地所には建物とダム建設のためのまるいしがたくさんあり、

煉瓦をつくるための砂と粘土も豊富だといわれている。この地所に鉄礦があることは、わかっているが、その量はまだ、あきらかにせられていない。ミシガン・セントラル鉄道は、マンシヨンの予定敷地の北方一マイル半のところを走る。ここには熱病の原因はない。七年間に熱病で死亡したのは一五〇人につき、わずか二人であった。この地所は地味ことのほか肥沃、平原は、<sup>ナール・オーク・ニング</sup> 樺の林の中の空地、<sup>デシバード・ランド</sup> 森林におおわれた土地、<sup>ゴットカイン</sup> 水辺の低地と、非常にブライエチーに富んでいる。その中の三、〇〇〇エーカーは、現金で評価して、われわれのアソシエーションに出資するという申込をうけている (Tendered to our association as stock to be appraised at the cash value)。この土地の九〇〇エーカーは、すでに開墾されている。その他のほとんど全部は、他の土地に住んでいるメンバーの処有している開墾した土地と交換するという申し出がなされている。

これで、土地の大体の様子はあきらかであろう。それとともに、なぜこの土地がえらばれたかも、わかるであろう。ただ、この記述の中には、気候のことがぬけている。あるいは、報告にはあるが、この記述においては、それが、ぬかされているとおもわれよう。だが、また、報告それ自体、それに、ふれていない、とも、おもえる。それには、二つの理由がある。その一つは、この報告は一月一六日以後一月三日以前というかぎられた期間の調査にとづく。そのことは、前述せるところようして、あきらかである。それは一年の中のみじかい一時期、厳寒の候の一時期にすぎない。それでは、季節のことはいえない。それが一つである。いま一つの理由は、地勢とこととなり、気候は、大体ミシガン州としてはおなじことである。たいしたかわりはあるまい。そうすれば、ひとびとにとって既知事項である。あらためて報告するまでもない。そうかんがえられる。これが、第二の理由である。いづれにしても、いま引いたところには気候の点がぬけている。そして、この会議への報告書としてなら、あるいは、それでもよいかもしれない。しかし、われわれとしては、それではすまない。そこで、それをうかがってみたい。とこ

ろが、さきに見たごとく、この地は、コムストック村の東南部にあたる。コムストック村はカラマゾー市の東郊にあたる。そして、カラマゾー市は、永井荷風が、そのわかき日の一時期を、すごしたところである。かくて、われわれは、いま、われわれが問題としているところのものを、かれの「あめりか物語」の中の「春と秋」と題する短編の中にみいだすことができる。それはカラマゾーを舞台とするものであるが、そこに、われわれは文人の繊細華麗な文章を通じて、この地方の四季のうつりかわりの様相をうかがうことができる。だからわたくしは、この問題をそれにゆずって、さきにすすむであらう。

すこし、みちぐさをくつたきらいが、ないでもない。はなしを本すじにもどそう。ベルブの会議では地所決定のほか、規約の修正、完成、採択をするはずであったことを、われわれはおぼえている。それは、おこなわれた規約は、より完全なものとなせられ、より大部のものとなり、採択された。署名したメンバーは五一名であった。いずれも、家長で、りっぱな農夫・技術者・製造者<sup>10)</sup>であった。しかし、規約はこれで最終的にきまつたとはいえない。なんとすればシェッターイは、さきに引いた一八四四年五月二〇日づけの手紙の中で、「アッソシエーションは三月の第二水曜日に、その第一回年次集會を開催、四日間にわたり、その規約および付則を修正し、その閉會にあたり、これを採択した<sup>11)</sup>」と、いつているからである。しかしながら、ここで、ともかく、規約は、一応できあがったのである。それでは、その規約は、いかにあるか。もともと、アルプアデルフィアはフリーエー派のファランクスである。そして、そのこと自体、すでに、その規約が、いかにあるかを、ものがたつておるはずである。したがって、いまあらためて、一々その条文をかかげる労をとるの要はあるまい。だから、ここには、つぎの諸点を指

摘するにとどめる。

規約は教育・一般的健康、および、道徳的改革の問題を詳細に明記する。善良な、道徳的品格をもったものは、二二歳にして、出席者の三分の二の票によって、メンバーシップがゆるされる。ただし、むこう六ヶ月分の糧食<sup>プロヴィン</sup>を有するか、もしくは、提供する資力を有することを要する。しごとをするものは、その労働の質と量に応じて報酬があたえられる。労働は量・質とも男女によりて差別せられることはない。女子は一八歳で、メンバーの所要票数により、メンバーとなることができる。メンバーの信教および政治上の意見は弾圧もしくは侵害を受けないものとする。メンバーは、いかなる方法によつても、いかなる宗教的礼拝をも、支持することを強要せられることはない。さらに、地所居住メンバーは疾病その他により、その資力により生活することのできぬ場合は、すべて扶養を受ける。<sup>12)</sup>

ちなみに、シュエタリイ博士はこの規約にみられる自由をたたえて、こういつている。

われわれの規約は自由主義的であり、個人の自由と独立を最高度に保障する。資本は完全にその権利が保護され、その利子が保障される。云々、<sup>13)</sup>

地所がきまり、規約ができあがった。アルファデルフィアの基礎条件がなりたつた。ひとたび、このことがしれわたると、加入をのぞむものが、われも、われもと殺到した。アッソシエーションは、その数を制限するを適當とかがえざるを得ない状態におかれた。ころみに、一八四四年二月五日付けの「ファランクス」紙をひらけば、われわれは、そこに、アルファデルフィアについてのつぎのごとき報導をみいだす。

……(入手している情報に徴すれば)、応募者の数が非常に大であるから、そのわずかな平数のみを収容するにすぎない公算がきわめて大である。<sup>14)</sup>

かくて、シエッタリイ博士はさきに引いた手紙の中で、一八四四年三月の第一次年次集会の開会に際し、「一、一〇〇人の加入をみとめた」といい、さらに、「五月一日の集会の後においてはメンバーの数は一、三〇〇人以上に増加し、きりがなから一〇〇人以上の加入志望者をことわった。数の多いのおどろいている」といつている。<sup>15)</sup>

当時フリーエ派のいわゆるファランクスはたくさんあったが、そのメンバーの数はまちまちで、すくないものは一五名から多いものは九〇〇名におよんでおり、その間大きなひらきがあったが、その多くは、一〇〇から二〇〇の間であったといわれている。<sup>16)</sup>いま、しばらく、この数字にしたがえば、アルファデルフィアのメンバーの数は、けたはずれに大きいと、いわなければならぬであろう。シエッタリイ博士がおどろくのも、わりはない。では、それは、なぜであろうか。

それは、なによりも、シエッタリイ博士が説くフリーエリズムが、コムストック地方のひとたち、とくに、いわゆる開拓者パイオニアとよばれるひとたちを魅了したからでなければならぬ。それは、いうまでもないところである。たしかに、かれのとくフリーエリズムはかれらを魅了した。かれらはかれのとくフリーエリズムに狂熱的に帰依した。そして、その場合、われわれはシエッタリイの力を高くかわねばならぬであろう。それはもちろんである。だからわれわれは、バレンがつぎのごとく記するところを、すなおに、きいても、よからうとおもう。

かれ(訳者注、シエッタリイ博士)はクーパーバリーばりの描写で絵のような生活——伝説的理想郷古代アルカディアにおけるごとき健康と享楽・スバルタ式の誠実と質素の生活、その曆には利己的な「おのれのもの」と「おまえのもの」が存しないであら



う、なんとかなれば、すべてのものは、より人間のな、より調和的な「われわれのもの」のなかに吸収されるであらうから、と、そういった生活——をえがいて、かれらの想像にうったえた。かれはすぐれた雄弁家であった。かれはフリーエー、オーエンの哲理・学識および論理を駆使して聴衆に深甚な感銘をあたえることができた。かれが、そこにおける牧歌的な幸福な生活をえがくとき、その絵が、その帰依者たちには、カラマゾフの両岸・将来のマンションに、用意せられているようにおもわれたことは、想像にかたくない。ここで、開拓者たちは、妻子にかこまれて、つぎの詩を実現するであらう。

うましとぞ	よこぞよきとぞ	“Here on the fertile, fair domain,
むきほりの	ことしおもむぢ	Unwexed with all the cares of gain,
あつきなう	はたをむきゆ	In summer's heat, and winter's cold,
むれひつじ	かいてありなほ	He fed his flock, and penned his fold;
たのしきた	ときもわすれう	His hours in cheerful labor flew,
よこしまほ	しるにみしなし	Nor strife, nor hate, nor envy knew.”

このフリーエーの使徒が、かれらの間にそのすがたをあらわしたは、はじめより、移住者たちはかれのたく生活の新説に異常な興味をいだいた。そして三日をすぎぬうちに、かれらの多くは、熱心なフリーエーの徒となっていた。そして、アッソシエーションへの加入を熱望してやまなかった。<sup>18)</sup>

しかしながら、そういうバレン自身、また、つぎのようにも、いつてゐる。

今日において、はじめに、かつ、冷静に回想するとき、このおとこで、かみのくろい・ドイツ人の社会主義者が、実際的な

堅実な常識とひととを、をみる日のごえていることで名を得ていた……初期の開拓者たちを、フリーエーの徒に化するというが「ごときことは、まさに」七月四日の演説の文句」を、ネトクリッドの命題の証明に挿入することによつて、ブレイフ・フェア教授 (Prof. Dayfair) を愚弄せんとするにひとしい、ということは、われわれの容易に想到するところであろう。<sup>19)</sup>

そういえば、たしかに、そのとおりである。いくらシュタリイ博士が有能な士でもあるとしても、それだけでかたづけけるには、その魅了ぶりはあまりにも大きいといえそうである。それだけですますには、かれらの狂熱的帰依ぶりはあまりにはなほだしいものがあることを、いなみがたいようにも、おもわれる。それでは、それ以外に、いかなる理由があるであろうか。そして、それは、どこにもとめられるであろうか。そうたづねるとき、われわれは、それにこたえるものを、かれらパイオニアたちの中に存する事情の中にさぐらねばならないことにきづかざるを得ないであろう。それでは、パイオニアたちの事情の中に、われわれは、いかなるものをみいだすことができるであろうか。しばらく、バレンの論ずるところを、きこう。かれはいう。

かれらが、ひとしく、なめてきた艱難辛苦は老いた開拓者たちの間にはほんとうの兄弟関係ブラザーシップを確立していた。かれらの財産は、共有でこそなかったが、ひとびとに羨望の念をいだかせることもなく、また、ひとびとの間に差別のあつまいを生ぜしめることもなかった。栽培はもとより、開墾においても、とうもろこしのかわむぎのあつまりにおいても、たがいに、たすけあい、そうして、また、あらゆる労苦をとおりにぬけ、あらゆる困難にうちかかってきた。かれらの援助乃至親切が、すこしでも役立つところでは、どこでも、それは、こころよく、あたえられた。かれらは、まづしきは、おなじでなかったが、富める階級はなかった。べつに、これといった、あらそいや競争もなかった。かれらは、おなじコンミニニチーのなかで、ともにくらし、一家の家族のように、団楽し、幸福にひたっていた。だから、シュタリイ博士が現在アルファデルフィアとよばれる家族的な勤労のア

アッソシエーションを創立するために、この地に来たとき、かれが、そこにみいだした移住者<sup>セトラーズ</sup>たちは、みなとまではゆかなくとも、大部分は、アルノアデルフィアのひととして、ことをともにすることのできるひとたちであった<sup>20</sup>。

まったく、そのとおりであったであろう。わたくしは、それをうたがわない。原始時代のひとは、そのような生活をした<sup>21</sup>。その後に行ったつても、ひとはそれに似た状態においてはそのような生活をしている。たとえば、ゴールド・ラッシュで荒野の中に身を投じたひとびとに、われわれは、その証左をもとめることができる<sup>22</sup>。

こうみてくると、さきのバレンのいうところは、これを、すなおに、きいてよい。そうすれば、また、シエッタリイ博士の報告の冒頭の、候補地調査委員の一員としての、かれの努力の成功に関する部分も、うけいれることができようと、いうものである。それは、つぎのごとくである。

一八四三年二月二七日、

カラマゾー州ゲールスバールにて、

ベルブユにて開かれるフリーエー会議御中、

あなたがたの委員会は本月二三日土曜日当地に着きました。そして、この地におけるひとびとの間に、現在、アッソシエーション加入の熱情がみなぎっており、この熱情は、かれらの願望がかなえられるまでは冷却させることが不可能である旨を申しあげることをよるこぶものであります。あなたがたの委員によって、二つの集会がもたれました。集会は、いづれも、三時間継続し、聴衆は多数殺到し、より詳細な情報をもとめてやみませんでした<sup>23</sup>。

かれは、さらに、すすんで、デビッド・フォードがいったと、いって、「なんびとも、人類の最善の利益を推進

するために考案せられたる諸原理が、かくもみちみちている計画に反対してはならない<sup>24)</sup>ということばを引いている。

いまや、アルファデルフィア・アッソシエーションは、規約ができあがった。地所もきまつた。ひと、あつまつた。かくて、アルファデルフィアの活動がはじまる。それでは、それはいかに活動するか。

まづ、さきに、ちよつと、ふれたところであるが、かれらの地所での第一回の年次集會が開催されるのをみることにとなる。それはシェットタリイ博士によれば一八四四年三月の第二水曜日にはじまり四日つづいたことになる<sup>15)</sup>。しかるに、バレンは一八四四年三月二一日午前八時ハーベイ・ケイトの宅で開かれたといっている<sup>26)</sup>。すると、ここにくいちがいがおこることになる。三月の第二水曜日は、もつともおそくても一日であるはずである。一五日になれば第三水曜日でなければならぬ。どちらかがたざしいとすれば、どちらかは、あやまりでなければならぬ。

第二水曜日が二一日であるということは、あり得ない。では、どちらがたざしいのであろうか。それとも、どちらもあやまりなのであろうか。しばらくどちらかがたざしいものとすれば、バレンのいう方がほんとうなのではなからうか。というののは、かれの日時の方が日時の記録として、よりととのつておる。それに、より詳細である。それにかかれは、このことを二ヶ所で、いつている。さらに、一八四四年三月二一日は第三水曜日の翌日にあたる。シェットタリイ博士が、とりちがえる可能性がありうると、かんがえられそうであるではないか。そういう気がする。はたして、いかなるものであろうか。それは、とにかく、この最初の年次集會において、さきにふれたごとく、規約および付則の修正、採択がおこなわれ、会長 (President) 一名、副会長 (Vice President) 一名、秘書 (Secretary)

一名、理事一二名がきまつたものごとくである。また、このアッソシエーションの名称がアルファデルフィアと  
きめられたのも、この集会においてであった。そして、次の集会を五月一日、この地で開くことを決定して散会し  
た。<sup>27)</sup>散会にさきだち、メンバー一、一〇〇人の加入をみとめたことは、さきに、すでに、述べたところのごとくで  
ある。

この会議がおわると、役員は、ただちに土地の獲得に乗り出した。地所は、はじめは、ユムストック部落の南東  
の区域を包含する予定であった。最初の年には、二三区セクションの、ほとんど、全部、二四区の西半分、および二五・二六  
区の各北半分の大部分を獲得した。<sup>28)</sup>シュェッタリイ博士のいうところによれば、非常な困難を排して二、八一四エー  
カー（中、九二七エーカーは、すでに、開墾済みの耕地）を確保した。価格は三二、〇〇〇ドル。ただし、土地の負  
債（Land-debt）は、わずかに、五、七七六ドル。その理由は、土地の大部分は、資本（stock）として、投下され  
たからである。そして、右の負債は申し込み資本（proposed capital）二四〇、〇〇〇ドルの中から支払われるこ  
とになっている。そしてその二四〇、〇〇〇ドルの申し込み資本の中、一四、〇〇〇ドルはこの夏と秋に支払われ  
ることになっている。そういうことであつた。<sup>29)</sup>

土地のつぎには住宅の問題がひかえている。住居は、はじめ、河の南岸が予定せられていたが、後にいたり、そ  
の対岸が選定せられた。<sup>30)</sup>シュェッタリイ博士が、一八四四年五月二〇日にかいた手紙を見ると、アルファデルフィア  
・アッソシエーションは、このシーズンには、マンションの建築に着手する意図をもたなかったが、両翼をふくめ  
て長さ五二三フィートの木造二階建てのビルディング建築のために、いくつかのグループが結成され、その秋には

完成をみるはずであり、それはマンションが建つまで住居として使用され、マンションができた後は、絹工場やその他の仕事場にあてられることになるであろう、と、ある。<sup>31)</sup>

しかし、アルフィデルフィアのメンバーがきわめて多いことは、われわれのすでに、みたところである。そのように大勢のメンバーを収容するのに、それでよいであろうかとの疑問がおこるであろう。しかし、バレンのつぎの記述が、その疑問をといてくれるであろう。

コムストックのメンバーは、かれらのもち、えに住んでいた。遠来のひとたちは、なんとか都合して、どこかの家庭に宿泊した (we're accommodated such homes as they could get)。やがて、長いかりいぢ (Shanty) が河の北岸に建った。それは一般の「タムルナクル」として (as a general "tabernacle")、新来のメンバーによって、一八四四年秋マンションのたつまで、しめられた。このため、もとは、約二〇フイートと二〇フイートの (矩形) のもので二階建てであった。<sup>32)</sup>

しかしながら、これをよむと、さらにあらたなる疑問が生ずる。バレンがマンションというたてものは、どうもシェッタリイ博士のいつているたてものと同一のようにおもわれる。もつとも、長さはちがう。しかしシェッタリイ博士は「両翼をふくめて」といっており、バレンは「もと」といつている。だから、それは算定の方法のちがいに帰してよいと、かんがえることをゆるす余地がないわけでもあるまい。だが、また、それはシェッタリイ博士によれば、マンションではないはずである。マンションではないとすると、それはシェッタリイ博士のいうたてものは、別のものということに、ならねばならないのではないか。それでは、シェッタリイ博士のいうたてものは、バレンのいうかりごやのことでは、あるまいか。そうもかんがえられる。しかし、そうすると、こんどは、それは、シェッ

タリイ博士によれば、秋にたつはずである。しかるにバレンによれば秋にたつたマンシヨンよりさきにたつたもので、ある。もちろん、バレンは、さきにたつたと、いうだけである。秋にたつたものでないとは、いつていない。さきはさきだが、秋である、ということも、ありうる。それにしても、それなら、そのほかに、さらに、バレンのいうマンシオンは、いつたい、どうなるのであろうか。シエッタリイは、木造二階建てはマンシヨンのたつまでの、かりのもので、その落成は秋だといっている。その秋に、さらに、マンシオンをたてたのであろうか。もちろん、シエッタリイがそれをいうたのは、五月二〇日のことで、それは予定にすぎない。予定は変更がありうる。そして、この場合、変更があつたと、いうことになれば、問題はなくなる。それにしても、マンシオンはファランクスの中心をなす建物であるはずである。それだけに、それはりっぱなものが意図せられていたと想像することは、不当ではあるまい。それなのに、これでは、かりのたて、ものとおなじく、やはり、木造二階建てで、しかも、より小さいこととはあつても、より大きいことはないようにおもわれる。そうみてゆくと、やはり、シエッタリイ博士がかりのたて、ものといっているものを、バレンはマンシオンとよんだのではないかと、おもわれる。そして、バレンが、それをマンシオンとよぶのは、ひとびとが、そうよんだからであらう。そして、それは、かならずしも、あり得ないことでもあるまい。けだし、マンシオンは、ファランクスの中核である。フリーエリートがこれをもとめる情はクリスチャンが教会堂をもとめる情にも比し得られるであらうからである。そこで、こうは解せれないか。シエッタリイ博士が、はじめ、マンシヨンのできるまでのかりのたて、ものとしたものが、後にいたり、マンシオンとよばれることになつた。そして、一方、そののできあがるまでに、さらにかりごやができたのである、と。そして、そう解することは、メンバーの増加をおもい、そのことが、住宅難を深刻化するであらうことを想像すれば、きわ

めて、妥当であろう。そして、後年、マクドナルド (A. J. Macdonald) が、シェッタリイ博士より得た資料に、「フアランステリーのはしり、をたてて最初の冬をすごすひとびとを住まわせた」とあり、また、「大きな木造のたてもの、の建築もはじめられた。そして、あたたかい天候の間、多数のひとが一つの大きなかりごや (shanty) に住んだ」とあるのをみいだすとき、その妥当性は正当性にすむであろう。

かくて、いまや、アルファデルフィアにあつては、「規約ができあがつた。マンションもたつた。各メンバーの財産は、動産も不動産も、そのために選任せられた有能な鑑定人たちによつて評価せられて、その額は、額面五〇ドルの株として、アッソシエーションの帳簿に、各メンバーの貸方に、記入せられた。」<sup>34)</sup>そこで、アルファデルフィアニズムが、いよいよ、うごき出すことになる。では、それは、いかに、うごいたか。

シェッタリイ博士は、例の五月二〇日の手紙の中で、こう、のべている。

われわれのメンバーには、水車大工五人・機械技師六人・鍛鉄師たち・印刷人たち・織物や紙等の製造者たち、および、その他、ありとあらゆる種類の技術者たち (almost every kind of Mechanics you can mention) がおり、それに、農夫は、とても、たくさん、いた。<sup>35)</sup>

かれは、また、後年、さきに、ひきあいに出した、マクドナルドに、つぎのごとくのべている。

アッソシエーションのメンバーたちは、大部分は、農夫であったが、建築家たち、靴屋たち、仕立屋たち、鍛冶屋たち、ペンキ屋たち、それに編集者が一人、いた。みな、かなりのうで、まえをもっており、一応なにごとにも通じていたが、ここで出して



いたトクサン (Tosson) という新聞に寄稿することのできるものは、ほとんど、いなかった。<sup>36)</sup>

バレンも、おなじように、「教師・印刷者・医師・大工・仕立屋・靴屋・編集人・荷馬者製造人」のいることを述べ、<sup>37)</sup>さらに、その氏名まであげている。そして、つぎのごとくいう。

アルファデルフィアの活動は、各人が、かれの、または、かの女の、特技において、推進することができた。あるものは農夫として、あるものは主婦として、他のものは医者・教師・編集人・および印刷人として、また、あるものは、<sup>38)</sup>連奮御者・仕立屋・煉瓦づくり・あらゆるしごとのひとつとして。そして、アッソシエーションにおけるあらゆる、しごと (professions, trades, callings) ・技能・熟練・および労働の、役に立つかぎりのものは、みな、適材が適所にふりむけられた。かくて、なかよく生活し、なかよくはたらき、たがいに啓発し、じぶんの労働の産果をじぶんで享受し、一家のごとく幸福に団聚する。この偉大な目的のためにこそ、この組織はつくられたのである。

そうは、いつても、活動の中心は、産業にあり、産業の中では、農業が大きな比重をもっていたとかがえられる。それはメンバーの「大部分は農夫であり」、「農夫は、とても、たくさん、いた」事実より、容易に推測しうるところであろう。

産業以外においては、学校も設置されている。はじめは一校で、<sup>37)</sup>校舎は丸木のためもの (a log building) で、河の南岸にあり、生徒たちは河の反対側に住んでいた。それで、ボートで河をよこぎって登校したものである。後にいたり、シェーカー (Shaker) のアベリー (Mr. Avery) というひとが北岸で教えることをはじめた。<sup>40)</sup>

新聞も刊行された。名はアルファデルフィア・トクサン (Alpha delphia Tosson) とよった。編集人はシェッタ

レイ博士とリチャード・ソーンントン師 (Rev. Richard Thornton) 印刷者はレヴィ・S・ブレイクスリー (Levi S. Blakesly) と C・W・ソーヤー (C. W. Sawyer)。ソーンントン氏はさきにアナバーでプリミティブ・エクスバウンダー紙を出していたひとであるが、ここでも、またプリミティブ・エクスバウンダー紙を発行した。これは忠実なユニバサリストの新聞であった。ちなみにこの運動の指導者は、たいいてい、ユニバサリストであった。<sup>41)</sup>

この運動の指導者はたいいていユニバサリストであるといった。しかし、ここでは、信教は自由であった。そのことは、すでに、規約をうかがうたときに、あきらかにしておいたところである。もつとも、さきにいったように、この運動の指導者の多くはユニバサリストであった。だから、いきおい、アルファデルフィアにおける説教は、たいいてい、同派の牧師によっておこなわれた。<sup>42)</sup>しかし、来合はせたひとの、たれからでも、説教をきいたものである。そして、その際、その教条は問うところでなかった。<sup>43)</sup>

このようにして、アルファデルフィアはすすんでいった。そして、シエッタレイ博士が一八四四年五月二〇日づけの手紙をかいたとき、かれは、アルファデルフィアの将来の繁栄をうたがうことができなかつた。<sup>44)</sup> 一八四六年一月一七日付の「ハルビンガー」紙 (*Harbinger*) は、アルファデルフィアの前途は洋々たるものがある、と報じている。<sup>45)</sup> しかしながら、このアッソシエーションの日記帳 (the journal) えの記入は一八四八年四月三〇日のそれが最後のものではあつた。<sup>46)</sup> 一八四四年三月二二日、この地における最初の集会から、この日にいたるまで四ケ年、アルファデルフィア・アッソシエーションの到達したところは、他のフランクスとおなじところであつた。いわく、失敗という名の終着駅。

アルファデルフィアは失敗におわつた。それはなぜか。その失敗の因は何か。それについては、いろいろのことが、あげられるであろう。シェッタリイ博士も、バレンも、いろいろとあげている。しかしながら、いま、ここにはそれらの一々にふかく立ちいるだけの余白がない。そこで、それらを要約するにとどめなければならぬ。そこで要約すると、一、人の和をかけたこと、二、なまけものが多くいたこと、三役員が経営の才を欠いていたこと、に帰することができるようである。しかし、それなら、とわたくしは、うたがう。もし、それらのことがなければ、アルファデルフィア・アッソシエーションは失敗しませんでしたであろうか、と。そうすると、あるものはいふかもしれない。仮定的質問にはこたえられない、と。そういわれると、もはや、なにかいわんや、ということになる。しかしながら、もし、ひとあつて、しかり、というならば、わたくしは、そのひとに、とうであろう。ファランクスはみな失敗したのに、アルファデルフィアのみその例外をなしうるとかかんがえられるか、と。このひとに対して、そのひとが、こたえとすれば、そのこたえは、おそらく、つぎのごとくでなければならぬであろう。いわく、およそ、ファランクスは、みなこの三つの敗因をもつ、と。しかし、そうすると、こんどは、ファランクスは、なにゆえにこれらの敗因をもたねばならないかが問題にならねばならないであろう。そして、そのとき、われわれは、ファランクスに、これらの敗因を生ぜしむる因、いいかえれば、ファランクスそのものの欠陥、さらにこゝとばをかえて、いえば、ファランクス——あるいは、さらに、すすんで、ひろく、ユートピアン・ムーブメント——に一般的の、あるいは、共通する失敗の原因を追求している、じぶんをみいださざるを得ない。それでは、それは、いかなるものであろうか。それは、ここでとりあつかうには、あまりに大きな問題であろう。当然、それは、それ

自体として、あらためて、とりあげられることを要求するであろう。だから、ここでは、これについて、つぎのとき指摘でおわることをゆるされたい。

ラフカチオ・ヘルンは、ユートピアン・ムーブメントは進化の大法則にそむくから、失敗するのは自明の理だという。かれによれば、およそ、現在の社会は進化の現段階において人間のいとなみうる最善の社会である。人間は現在それ以上のものをつくり得ない。これをすてて、他のよりよい社会をもとめることは不可能である。だから、それは失敗せねばならない。<sup>45)</sup>

ヘルンは、ユートピアン・ムーブメントの敗因を進化の法則より説明せんとした。それに対してと、いうわけではないけれども、わたくしは、それを経済の法則より説明できるとおもおう。かくて、わたくしは、かつて、こうのべた。「資本主義が発展し、資本の集積集中が大となると、……かれらは、大企業に対する中小企業の立場に立つみづからをみいだすことになった。……かくて、かれらは、澎湃としておしよせる資本主義のまえにはかなくも消えていった。しよせん、それは、資本主義のながれにうかんで、かつむすび、かつ消える、うたかたにすぎなかった。そうみてよいのではなからうか。<sup>46)</sup>」

最後に、しかしながら、しばしば、おこなわれているものに、それを人性から説明せんとするもの、がある。その場合、普通、利己心があげられる。それは、あらためて述べるべくあまりに周知のところに属する。だが、これまで本稿にしばしばひきあいに出したバレンが、いつていることはおもしろい。だから、ついでに引いておく。いわく、「このような制度は、ヤンキーの野<sup>アンビション</sup>心・独立・および個人的冒険心と両立しない。そのことが、これまで、いつも、その失敗の原因であったし、これからさき、いつも、その失敗の原因である。」(The incompatibility

of such a system with Yankee ambition, independence, and individual enterprise ever caused and ever will cause its failure.) (196. 29. 2.)

- (1) For example, see Everett Webber, *Escape to Utopia*, New York, 1959, p. 171.
- (2) John Humphrey Noyes, *History of American Socialism*, Philadelphia: J. B. Lippincott & Co., London: Trübner & Co. 60, Paternoster Row, 1870, p. 15, p. 17.
- (3) A. D. P. Van Buren, "The Alphadelphia Association, its History in Comstock, Kalamazoo county," *Pioneer Collections, Report of Pioneer Society of the State of Michigan, together with Reports of County, Town, and District Pioneer Societies*, vol. V, Lansing, Mich. W. S. George & Co., State Printers & Binders, 1884. (reprint 1904) p. 407, John H. Noyes, *ibid.*, p. 389.
- (4) John H. Noyes, *ibid.*, p. 391.
- (5) *ibid.*, p. 388.
- (6) A. D. P. Van Buren, *ibid.*, p. 408,
- (7) *ibid.*, p. 407, John H. Noyes, *ibid.*, p. 390.
- (8) A. D. P. Van Buren, *ibid.*, p. 407, John H. Noyes, *ibid.*, pp. 390-391
- (9) 永井荷風・あまつか物語・春と秋 (朝日文庫一九・永井荷風・冷笑他・昭和十五年・朝日新聞社刊・頁五四一七四)
- (10) A. D. P. Van Buren, *ibid.*, p. 408.
- (11) John H. Noyes, *ibid.*, p. 391.
- (12) A. D. P. Buren, *ibid.*, p. 410.
- (13) John H. Noyes, *ibid.*, p. 394.
- (14) *ibid.*, p. 388.
- (15) *ibid.*, pp. 391-392.

- (16) *ibid.*, p. 18.
- (17) A. D. P. Van Buren, *ibid.*, pp. 408-409.
- (18) *ibid.*, p. 409.
- (19) *ibid.*,
- (20) *ibid.*,
- (21) 担糶モートニアに於て 經濟論叢・第八十五卷・第六号・(昭和三五年六月)
- (22) See Pierre Berton, *The Klondike Fever*, New York, 1958, p. 23.
- (23) A. D. P. Van Buren, *ibid.*, p. 409.
- (24) *ibid.*,
- (25) John H. Noyes, *ibid.*, p. 391.
- (26) A. D. P. Van Buren, *ibid.*, p. 409, p. 411.
- (27) *ibid.*, pp. 409-410.
- (28) *ibid.*, p. 409.
- (29) John H. Noyes, *ibid.*, p. 391.
- (30) A. D. P. Van Buren, *ibid.*, pp. 409, 411.
- (31) John H. Noyes, *ibid.*, p. 392.
- (32) A. D. P. Van Buren, *ibid.*, p. 410.
- (33) John H. Noyes, *ibid.*, p. 395.
- (34) A. D. P. Van Buren, *ibid.*, p. 410.
- (35) John H. Noyes *ibid.*, p. 392.
- (36) *ibid.*, p. 395.
- (37) A. D. P. Van Buren, *ibid.*, p. 410.

- (38) *ibid.*, pp. 410-411.
- (39) John H. Noyes, *ibid.*, p. 395.
- (40) A. D. P. Van Buren, *ibid.*, p. 410.
- (41) *ibid.*, p. 410.
- (42) *ibid.*, p. 410.
- (43) John H. Noyes, *ibid.*, p. 395.
- (44) *ibid.*, pp. 391-394.
- (45) *ibid.*, p. 394.
- (46) A. D. P. Van Buren, *ibid.*, p. 411.
- (47) *ibid.*, p. 411, John H. Noyes, *ibid.*, pp. 304-396, 650-651.
- (48) Lafcadio Hearn, *A History of English Literature*, Tokyo, 1927, pp. 894, 897,
- (49) 掲載「モートメントに於て」経済論叢・第八十五巻・第六号（昭和三五年六月）頁二三二―二四。
- (50) A. D. P. Van Buren, *ibid.*, p. 412.